

ディラン——考えないで、いい

井坂康志（メディア・プロデューサー）

I 絶望的な「かみあわなさ」

ボブ・ディラン氏とのつきあい——あえてそう言ってよければ——は、熱狂的にディラン氏を支持し心酔する人々の中ではごく短いものだし、ディラン氏についての知識となると、多少控えめに表現しても、心細いものであるのは否定できない。もちろん、ディランの研究をしているわけでもない。

それでも、ボブ・ディラン氏（めんどうなので、以下「ディラン」）について語りたいことが山ほどある気がする。別にディランと一緒にコロラドの山小屋で一週間を過ごしたり、土曜日の夜の番組でディランをプロデュースしたわけでもない。けれども、不思議なことに、ディランは心のなかに空気みたいに入り込んでいて、しっかりと位置を占めている数少ない人なのは間違いのない事実だ。

証拠になるかわからないが、場末のぎっしりとつまった居酒屋で、ほとんど隣の人が耳もとで何かどなっても聞こえない混雑にあっても、店内にディランがふと流れれば、ほぼ例外なく聞き分ける自信がある。もっと言えば、初対面であったとしても、どこことなくディランを通過した人かどうか、すなわち、ディランをひとつの「体験」として、自らの人生に取り込んだかどうかを、言葉の端、目つきや息づかいを通して理解することができる。

あなたは言うかもしれない。根拠はあるのですかと。もちろん根拠なんてない。ディランはむしろ根拠というもののいっさいを無効にする人なのだ。もっといえば、ディランはノーベル賞よりもはるか上にそびえる人なのだ。

ノーベル賞が無価値だというつもりはない。尋常ならざる偉業である。だが、本当の偉業というのは、ノーベル賞を含むありとあらゆる尺度を無効にしてしまうパワーを持っている。ディランはまさしく、価値基準やジャンルやカテゴリー、ありとあらゆる人間の精神的作為から意味を剥奪してしまう。

さらにあなたは言うかもしれない。「信仰とどう違うのですか」。

沈黙するしかない。確かに気持ちは、あらゆる神学者が下すであろう信仰の定義といくぶんたりとも変わらないのを知っている。あるいはディランはある種の人々にとって、ミュージシャンでさえないのかもしれないとも思う。何なのだろう。わからない。およそあらゆる安直なレッテルはおろか、カテゴリーもジャンルも何もかも通用しない人なのだから。

「僕を鋳型に流し込んだり、分類したり、否定したり、狂わせたりしないでほしい。僕はただ君と友だちになりたいだけ」（「僕が本当に望むこと」）

もう一つ。ディランの魅力は、どんなに努力しても、理解できないところにある。そも

そもディランだけでなく、詩や音楽は理解の対象ではない。冷徹なデタッチメントこそが、芸術の実像とさえ言える。哲学と宗教の相違になぞらえれば、哲学は何ごとかを明らかにしていくのに主題を置く一方で、宗教はわからなさをどう受け入れるかに主題を置く。ディランは後者ということだと思う。

たぶん何十年もディランばかり聴き続けたところで、変わらないだろう。わからないかぎりにおいて、ディランを聴き続けることも確かなのだ。

なぜなら、ディランは世界の絶望的な「かみあわなさ」そのものだからだ。

Ⅱ くよくよするなよ

ありがちのことで、しかも誰の興味も引かない話からはじめよう。

アインシュタインだったか、「人生観というものは、思春期に偶然身につけた偏見によって決まる」みたいなことをいっていたと思う。人は何かに自我を付着させて生きて成長していくということなのだろう。

たぶん中学一年の頃だ。

急速に色気づいた二つ上の姉を一人持っていたのだが、あるとき書棚に一冊の音楽雑誌が刺さっているのに気づいた。タイトルは忘れた。特集も忘れた。

『平凡』とか『明星』みたいなアイドル系の雑誌がいくつも出ていた記憶があるけれど、見たのはどちらかというところロック系で、しかもつめたく取り澄ました大人な感じの雑誌だった。比較的流行っていたニューミュージック系の記事が掲載されていた。要は、歌詞全体における横文字の混入率が高い歌い手たちだ。覚えているのは、ある記事が目にとまったことだ。

サザンオールスターズの桑田佳祐についての萩原健太氏の記事だった。現物はもちろん手元にない。記憶にあるかぎり、概要を紹介したい。

はじめにしておく、今のサザンと当時のサザンは天と地ほども異なる印象で世間に受け入れられていた。サザンはまだ学生バンドだった。音数がやたらに多い上に、思い切って歌詞を詰め込んでいるから、まったく聞き取れない。支配的な価値観の持ち主からすれば、「やれやれ、最近の若者は」と指弾する格好の矛先だった。

萩原氏が最初に桑田氏に会ったある夏の日、茅ヶ崎のどこかの公民館で、青学の学生だった桑田氏のライブがあったと記事は主張する。わざわざ出向いていったのだ。安手のパイプ椅子が無機質な会議室に敷き詰められ、ひとつに腰かけた。現れたのはやせぎすで、汚いひげを生やした学生で、ギター一本でいきなりがなりだした。ディランの「くよくよするなよ」。

「だみ声」（でかいだけが取り柄の、上品とはいえない声のことだ）、大量の汗をかいている感じ、そして桑田氏の圧倒的な個性（しかも自身は気づいていないような印象を与える）が、中一だった心に映写機に映し出されてみたいに浮かんできたのを覚えている。

サザンは好きだった。あの頃「チャコの海岸物語」を聞いたことのない人など皆無だっただろう。一方で、桑田さんの高貴な芸術を理解しようとする人さえいなかった。どこまでいっても「いろもの」であって、以上でも以下でもありえなかった。せいぜいのところ、威勢のいい花火を夏の夜に打ち上げて終わりというふうにしかなかったと想像する。

思う。「くよくよするなよ」ってどんな曲なんだろう。ボブ・ディランって誰なんだろう。

激しい乾きに有無を言わさず魂をたぐりよせられる気がした。口に出して言うてみる。

「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」「くよくよするなよ」……。

もちろん意味はわかる。「事態をあまり深刻に受け止めないようにしなさいね」「ぐるぐると出口のない同じことばかり考えて自分を消耗させるのは止めようね」、あえて言えば。

けれども、不思議なことに心の半鐘を鳴らしたのは、意味ではない。語感だ。なんというか、真言密教のマントラみたいなものというのか、音を通して、何か別の世界、しかも知りようもないくらいに広大無辺なもう一つの世界への呪文みたいに思えた。

あの頃ロックにとどまらず、名訳としか言いようのない見事な日本語タイトルがたくさんあった。レコード会社もしっかりと時間を費用をかけて聞き手に応えていた。むろんきちんとペイするだけの産業であったのも確かだろうが、たぶん詩人や作家になりたくてなれなかった人たちがレコード会社とか出版社、広告会社に流れこんでいたのだらうと想像する。遠い子供のころを思い返してみれば、ちょっとしたテレビCMなどで聴かれる日本語コピーなど、文学と見まがうほどに美しく、洗練されていたものだった。

「明日に架ける橋」「明日を抱きしめよう」「グイスをころがせ!」、上田敏の「海潮音」ではないけれど、原詩なんかくらぶるべくもないくらい、高貴な韻律を持っている。惹かれるなというほうが無理だ。ディランのみならず、タイトルに触発されていた。音楽も映画も本も、何もかも。

見せ物小屋の前口上だった。中に入るにはしかるべきお金を要するから、たいていは入口から先にはいけない。なのに、前口上だけでなぜかむくむくと内部で展開されるスリリングなストーリーが脳内に広がっていく。想像力に無数の選択肢とはてしない空間を与えてくれる。タイトルにすぐれた翻訳を与えた名もなき人々に、T・S・エリオットなら、「言葉の匠」の賛辞を与えるのにはばからなかったに違いない。

「世の父や母、自分の理解できないことを批判するなんてみっともないだろう？ 息子も娘ももう君の手の内にはいない。君らの古い道は急速にすたれていく」「時代は変わる」

ネットを手足のように使いこなし、無料で動画や音楽が視聴でき、あるいは英語を解するくらいに知識レベルの平均値が上がり、コンテンツへのアプローチが容易になった現代では考えられないことだ。

かえすがえすも現代は不便な時代だ。

Ⅲ 音楽が必需品だった頃

「くよくよするなよ」は中学時代の頭に得体の知れぬ呪文としてあったものの、ついに原曲を聴くことはなかった。ほんのちょっとだけれど、背景の説明が必要かもしれない。

あの頃考えていたのは、「音楽は聴きたいが、先立つものがない」ということだった。あえて経済学的に表現すれば、可処分所得が必要なコストを賄うのに慢性的に不足していた。

「たかが音楽で、おおげさな」とあなたは思うだろう。

確かに音楽は、米や味噌や、電気や水道のような必需品ではない。物理的にはなくとも困らないと言えなくもない。例外がある。「80年代という世の価値観や期待と物的環境が致命的にバランスを欠いていく時代に、思春期を迎えていない人に限る」という条件だ。氷上のクレバスに似て、めったにはまらないが、はまったが最後抜けられない暗黒だった。

音楽は心理的必需品だった。成り立ちが心理的であろうと物的であろうと、必需品は必需品である。なければなんらかのディスオーダーを惹起する。

ぼんやりした記憶だが、高校に入った頃、小遣いは3000円だったと思う。べつに高くも低くもなかった。たぶん高校生の小遣いの平均をとったら、おおむねこのあたりに収まるのではないかと思う。

一方でくせものは費用だった。とほうもなく高い。あの頃は輸入の洋楽CDなら、ふつうに3000円以上はした。多少安いものでも、2000円切るものは稀だった。寒風吹きすさぶ北関東のある都市のレコード屋で、「復刻」されたサイモン＆ガーファンクルのいくつかのアルバムが1800円で売られているのを見たとき、思わず心の中の手で合掌し、神に感謝したことを今もありありと思い出す。

ディランのCDは高いほうに属していた。大人の世界だった。でなくてさえ、一枚CDを買うごとに、一月分の小遣いぜんぶが消えてなくなっていた。混じりけのない贅沢品だったのだ。

抜け道がなかったわけではない。最たるものは、カセットテープだった。当時はまだテープからCDにいたる過渡期で、たいていの家にはレコーダーがあった。持っていたのはCDラジカセというもので、後光が差すくらいきらびやかな逸品であって、たいていの青春のつらさはかろうじて乗り越えられた。

確か高一の夏休みだった。「暑さ」と「暇」という二つの苦難にじりじりと灼かれていた。ダンテが現代に神曲を書いたら、「煉獄編」には無為な青春の苦しみを描いたに違いない。ときには背景の衆人の一人に描いてさえくれたかもしれない。

「そうして僕は帰ってきた。ともかくも。僕の知るすべての人々は幻だった。数学者になった人も、大工の妻になった人も。自分がどうはじめたのか、これからどうしようかも今の僕にはわからない」「(ブルーにこんがらがって)」

はじけ飛ぶように自転車を駆って、隣町のショッピングモールに行った。何も買うつもりはなかったけれど、外の世界に触れなければ内臓が爆発してしまいそうだったのだ。入口に入ったときに、見慣れないラックに気づいた。往年の歌手のベスト盤がところ狭しと並んでいた。ポール・アンカ、ビーチ・ボーイズ、プラターズ、数々のオールディーズ……。今では50年代文化論の脚注くらいでしかお目にかかれない人々だ。

だが、ディランを見つけたのだ。しかも、1000円という特筆すべき安価で。頒布されている60年代のディランの名曲群を。黄色っぽいボール紙に包まれ、見るからに安っぽいものだったけれど、冗談抜きで、1000円なんてただみたいに思えた。もちろん「くよくよするなよ」はしっかり収められていた。

1000円札を渡す代わりに、レジでテープを受け取った。とにかく聴きたくてならなかつ

た。前のめりに自転車をこぎ、さほど離れていない友人の家に行った。家に帰るまでの時間持ちこたえられなかった。

幸運なことに友人は家にいた。確か小林という名前だったと思うが、間違っているかもしれない。田中だったかもしれない。覚えているのは、小林だか田中だかの家のカセットデッキでディランをはじめて聴いたということだけだ。

カセットテープのいいところは、聴く順番が決まっているところだ。何度も聴くのに適していない。けれども、記憶媒体に記載された音楽全体に「ひとりこむ」には悪くない。たぶん今なお演歌を好む人々の間でカセットテープが活躍しているのは、時代だけではなく、メディア的特性も関わりがあると思う。

最初は、「風に吹かれて」。あまりにも有名な曲だ。ディランの代名詞と言っていい。ふつうスタジオで吹き込む音楽は、水の漏れるすきなくコントロールされ、何度も取り直しされる。ディランは違う。姿勢からして違う。少々フレットがミュート気味になっても、音がぶつかっても、世に出して済ましている。とんでもない大物か、あるいはとんでもない食わせものか（あるいはその両方か）。

今はどうにかセットはなくしてしまった。けれども、「戦争の親玉」(すごいタイトルだ)、「女の如く」「ミスター・タンバリンマン」「雨の日の女」・・・そんな感じの後に、いよいよきた。

「くよくよするなよ」

むきだしの脳天を金属が直撃する感覚を今も忘れない。とにかくむきだしなのだ。

無駄にリズミカルなギター、フィンガーピックのぎこちないハンマリング、北極の天空に響く轟音のようなハーモニカ、感情をなたでぶったぎり、紫の滴る血とともに海に沈めていくようなボーカル。たった3分ちょっとの曲のなかにはこれまで手にできずにいたもの、そして求め続けてきたすべてがあった。

何なのだろう。何が起こったのかもわからなかった。それでも自分の中の何かが反応したのはかろうじて理解できた。いい曲だと思ったわけでもない。染みるわけでもない。一直線に心の小さなつぼにぴたりと何かが収まった感じがかった。慣れ親しんだものにも感じられたし、遠いものにも感じられた。

つめたい別離の感覚だった。人からも故郷からもこの世からも、ついには自分自身からも別れていく感覚だった。いずれやってくる感覚であり、すでに何度も通りすぎてきた感覚だった。フォーク特有の甘さがなかった。アルプスの峻険な岩肌のように、はかりしれぬ力で大地を隆起させたあの力をそれは思い出させた。

別れを歌う曲は多い。というか、あらゆる音楽や詩は何かしら別れをモチーフにしている。ピーター・ポール＆マリーの「500 マイル」みたいな甘い感傷、シューベルトの「冬の旅」みたいな孤高の思想性。どれほどの詩と音楽の別れのパターンを抽出したところで、「くよくよするなよ」には似たものさえないだろうことは断言できる。

IV 弾いてみる

思い起こせば、あの15歳の夏、行ったことといえば、露店のたこ焼き屋みたいに、ディランのテープを何度も何度もひっくり返したことだけだった。手の動きだけ見ればだ。ハムスターが無限に車輪を回るように、ディランのテープを再生し、ひっくり返して再生し、

さらにひっくり返して再生した。

もちろん「くよくよするなよ」ばかり聴いた。ちょうどA面の終わりから三番目くらいでB面にひっくり返すと、「かなしきベイブ」、ディラン節のほどよく利いた曲になる。聞き終えるとまたA面にひっくり返す。ほんのちょっとで「くよくよするなよ」になる。

経験のある人はわかると思う。聴いていると、だんだん自分で弾いてみたくなる。というよりも、曲が自分の一部になるより、自分が曲の一部になる。母が音楽の教師で、クラシックギターがあった。ボディ背面には、マジックで母の旧姓が書かれていた。だいたい昔のものだったのだろう。母に頼んでクラシックギターを譲ってもらい、ガット弦をはがして、フォーク用のスチール弦をはった。

今考えると大胆なのだが、十分だった。基本的なコードを本を学習し、C、G、Am、そしてFを覚えた。ギターを弾く人ならわかるだろう。基本中の基本のコードといってよく、たぶんエリック・クラプトンだってこのプロセスを飛ばしたら永遠にギターは弾けなかったはずだ。

ディランの長所、正確にはディランを演奏しようとする人すべてに朗報である。少なからざるものは、基本コードでまかなえるからだ。しかも、「くよくよするなよ」は中核だった。

「時は来た。風は息をひそめ、嵐の前の静寂。あの船がやってくる」(「船が入ってくるとき」)

ポール・サイモンのギタープレイなどはむずかしい。いくつかの変則を含んでいて、素直に聞こえて素直でない。

サイモンは水の匂いがして、ディランは土の匂いがする。

高校一年の冬、家に帰ってから大半の時間をギター習得に当てることになった。少しばかり流麗に見えるサイモンとガーファンクルとか、ギター弾ける人をアピールできるビートルズも合わせて独習した。けれど、さしあたりの目標は「くよくよするなよ」だった。まさに最終目的だ。

ちなみに、「くよくよするなよ」がリリースされたのは、1963年のスタジオ録音だ。もちろんライブや他の録音で何度も吹き込んでいる。ふつうのミュージシャンなら、スタジオ録音を基本に、いくらか小気味よくメロディを変えたり、リフレインを刷新したりして、聴衆の欲求をやわらかく満たしてくれる。

サイモンとガーファンクルやPPMなどはある意味フォークの優等生といってよいと思われるが、ライブでもほぼスタジオ録音に忠実に演奏する。

ディランは違う。音楽とは、つどははじめからつくっていくことだから。武道館ライブなどではレゲエ調になるし、ギター一本でただ怒鳴りちらすときもある(志村けんに似ているという人もいる)。日本で聴いたとき、ハワイアンだったことさえある。音は生き物なのだ。

ずいぶんいろんなバージョンを聴いた。63年のスタジオ録音に匹敵するベストパフォーマンスには、ついぞ出会えなかった。月面の石みたいに、およそ人を寄せつけざる孤高としか呼べない何かを感じ取れた。

つめたさ、あの明け方の月のようなつめたさに、何よりも惹きつけられてやまなかった。

ディランの曲全般に言えることがある。簡単に見える曲ほど弾いてみるととてもむずかしいということだ。シンプルなコード進行、ぎこちない装飾音、一節ごとに海に沈めていくような重たいボーカル、ただ吸って吐いているだけに聞こえるハーモニカ、どれをとっても、聴いている分には簡単そうだ。

「風に吹かれて」などのコードはたったの三つ。ハーモニカは金属的で、およそ音楽的デリカシーは感じられない。

いざ弾いてみる——とてもむずかしいのだ。考えてみる。なぜむずかしいのだろう。わからない。何ら特別なテクニックを要求しているわけではない。音楽的情感さえ、要求されていない。それでもむずかしい。簡単に見えるものほどむずかしい。

「くよくよするなよ」も例外ではない。というか、もしかするとディランのなかでも、最高峰に近いぐらいの難物かもしれない。繰り返しになるが、テクニックとしては何ら新規なものはない。あるとすれば、GからFに変わるときにはっとさせられるハンマリングが入り、うっかりするとベースを鳴らすのがおざなりになるくらいだ。それでも、練習すればできるようになる。

たぶん、ディランのむずかしさの原因は、ディランというジャンルそのものをコピーできないところにあるのだろう。そう思うのだ。

「君は言う。いつも強く、君をどこまでも守ってくれる、そんな人が必要なのだと。呼べばいつでも来てくれる人がほしいのだと。それは僕ではない。僕は君が求めるその人ではない」(「哀しきベイブ」)

高一の冬にギターを始めた頃、北関東にあった家の二階自室には、白く煤ぼけたストーブがあった。冬などはほぼ表と変わらない。寒いのではない。冷たいのでもない。ただひたすらに痛い。北関東ほど気候の厳しいエリアはない。高い山に囲まれた茫洋たる平野である。自然がこしらえたただ広いフライパンだ。夏は極限まで暑く、冬は極限まで寒い。

家屋は夏にも冬にも合わせることができず、自然界で孤立している。したがって、自然環境の厳しさは侘びしい家並みの内部にも容赦なく適用される。寒風の厳しさは言うまでもない。何度か自転車での学校の帰りに、死を覚悟したことがある。黒い学生服の下は肌着だ。風をとめたり温めたりする機能などあるはずはなく、季節のずれたかかしみたいに、真冬の野天で下着一つで晒されているのと変わりがない。

よく生き延びられたものだと思う。

内面の心象が記憶に反映されているだけかもしれない。なぜか雪がよく降った気がしている。さほど雪が多い地域ではない。それでも、少なくない頻度で雪が降る景色が記憶に残っている。駅から家まで、特筆すべきものは何もない田舎道を歩きながら、心の中では「くよくよするなよ」がエンドレスに流れた。金属を激しくこすりつけたようなハーモニカや、血を吐くようなボーカルとひたすら絡み合い、繰り返し心の暗室をこだました。木々が白く貧しい田野に立ち尽くしていた。

学校から帰ると、ストーブにマッチで火をともし。いがらっぽい空気を確認しながらギターの弦を弾くと、極北の荒野を自分が旅しているような気がしたものだった。旅路はど

こにもつれていかない。氷のように冷え切った大地ばかりが広がっている。あることに思い当たった。

「僕は思う。彼女は僕を覚えているだろうか。いくたびも祈ったものだ。夜のつめたい静寂のなかで、朝のゆらめく光の洪水のなかで」(「北国の少女」)

小さい頃当然と思われた半ば安っぽいドラマ風の人生行路のイメージが、まったく根拠のないでたらめであるということだった。

なぜ気づかなかったのだろうと思った。地球はべつに自分を喜ばせるためにぐるぐると回っているわけではない。当たり前なのに気づかずにいたことに愕然とした。ディランに教わらなかつたら、今も知らずにいたかも知れない。要は自分の凡庸さに気づくために、20年近くも生きてきたことに呆然としたのだ。もっと早く教えてくれてもいいのに。

世は世でいくぶん不穏な空気に包まれていた。テレビをつければ妙に景気のいい話やスタイリッシュな人や商品ばかりが出ていたけれど、冷たい荒野から見るとそれらが偽りなのは何にもまして明らかだった。どこか遠い国で起こっている虚ろな事件のようにも思えた。よくしてせいぜいのところ茶番だった。世界は激しくうねり、航跡を変えつつあった。いろんな人たちが死んだ。あるいは殺害された。東欧の独裁体制が連鎖的に崩壊し、銃殺された独裁者の妙に白っぽい顔がグロテスクにテレビに映し出された。英語教師だった父が購読していた『タイム』誌の表紙には、天安門事件で頭を戦車に踏み碎かれた若者の写真がクローズアップされていた。

バブルの狂乱は世界で進行している凄惨な出来事とはまるで正反対のように見えた。もちろんそうでない。異常な好景気が狂気を生み出しているのではない。狂気がたまたま異常な好景気という形で自分自身を表したに過ぎないのだ。

あの頃、誰もがいつかくる世界の破滅を頭のどこかで意識していた。ノストラダムスの予言が信じられ、核戦争の兆候が探し求められた。日本の80年代のバブルでさえ、あの狂乱はどこかでこの世界の破滅を願望する無意識の欲求だった。

現代から見れば信じられない。あの時代の絶望的なまでの不均衡を何とかしのいで今に至ることができたのは、やはり僥倖だった。

「君はあどけない少女みたいに、ぽきんと折れてしまう」(「女の如く」)

高校生だった十代の半ば過ぎごろ、死について考えない日はなかった。いつもぼんやりと考えた。楽しみにさえしていた。「くよくよするなよ」を聴くたびに、想像する死の核のようなものが、手を伸ばせば届くくらいに近く感じることもできた。

ディランは書いている。「くよくよするなよ」はとても歌うのがむずかしい曲だと。「それは自分を説得する歌だ」とも。

そうなのだ。「くよくよするなよ」のディランの声は、硬くて冷たい。センテンスを魂の井戸のなかに投げ入れていく。ぶっきらぼうにも聞こえる。泣いているようにも、皮肉なようにも聞こえる。ありとあらゆる聴こえ方をする。

あえていえば、自分の中にある死と対話する。人にではない。自分の中にある自分なら

ざる何かだ。対話の相手が実在するものなのかそうでないのかもわからない。夢幻能に登場する女の幽霊のように。あるべき姿に戻るには、根底からの説得がなくてはならないのだ。

V くよくよしよう

別れというものを一抹の甘さと哀愁を伴うロマンティシズムの一種かと思っていた。実際に通りすぎてみれば、鋭利な刃物で臓器の半分をえぐり抜くような、肉体的な痛みだった。

そんなこんなで高校時代を終えた。1991年の3月のこと、世は変わらずバブルで浮かれていたが、冷戦のレジームにはいたるところねじが緩み始めていた。世界が変わっていくのだと思った。周囲は表面上は平和に見えたけれども、見せかけなのは誰もが知っていた。

受けた大学すべてに落ちて、浪人生活に入っていた。言うべきことは何もない。幸いなことに。

ディランのアルバムはごく初期の数枚だけ聴いていた。正直なところ、とっつきにくさだけはぬぐえなかった。はっきりとわかるものなどなにもない。ディランの芸術は暗示に暗示を重ねた難解な印象だった。

浪人が決まったあたり、近所のレコード屋で、「グレイテスト・ヒット VOL.2」という二枚組アルバムを手に入れて聞いた。タイトルとはまったく違って、ベストアルバムではない。ほとんどディランかプロデューサーが趣味でつくったような、かなりいびつで意味不明な選曲による。ライブ録音まで入っている。

今も気に入っているのは、とらえきれなさそのものだ。「イツ・オールオーバーナウ、ベイビーブルー」、わからないのだけれど、魂の芯が震えている。いや震えてしまう。理由はわからない。

「君の孤児たちが泣く、太陽のなかの炎みたいに聞く、やがて聖なる者がやってくるのを見る、こうして終わる、悲しい君」(「イツ・オールオーバーナウ、ベイビーブルー」)

浪人が決まって少しして、上野のレコード店で、比較的新しかったアルバム「オー、マーシー」を手に入れた。生温かい雨の降る日だった。生温かい雨が降る以外に何もない日だった。未来への展望などありそうもなかった。何が自分を待っているのかなど知りようがなかった。

そんなときに出会ったのが「オー、マーシー」だった。30分ほどだけれども、驚くほど精巧につくられている。曲作りも、編曲も、演奏も、心構えも、すべてが丁寧で親切なアルバムだ。さらには、一つひとつの曲に、宗教的な慈愛がしっかりとしみこんでいるように感じられた。安い買い物ではなかったが、今でも聞き続けているものの一つである。

ディランはある時期に突発的なキリスト教信仰を持つようになり、いわゆるキリスト教三部作というアルバムを発表している。70年代の初めくらいだ。ディランの宗教臭いアルバムが苦手で、あまり引かれることがなかったのだが、「オー、マーシー」は、はっきりとした文明批判、そして、人としてのプライドが見事に表現されたアルバムだった。

ディランの強さが、行く当てのなかった心を支えてくれるような気がしたのを覚えている。浪人していたからではない。なんだか、自分で自分を支えきれない気持ちだったのは、たぶんバブルが崩壊してすっかり世の中が変わってしまった、ソ連が消滅してしまって、頼るべき秩序がなくなった世界全体にもかかわりがあっただろう。しめっぽい分岐路ばかりが続いた 90 年代のリアルだった。

くよくよしていた。くよくよするのがならい性のようにになっていた。一浪して大学にはいってから、何としてでもギターのサークルで活動しようと思っていた。

前にもどこかで書いたわせだフォーク村に入って最初、音楽室で一曲披露することになった。他の人はたいてい自分で作った曲か、長渕みたいなものが多かったように思う。もちろんディランだ。さらには「くよくよするなよ」だった。

はっきり言って、自分のギターの腕前がどの程度なのかわからずにいた。というのも、独習しかしておらず人前で弾く機会がなかった。とはいえかなり難易度の高い曲も弾けるのはわかっていたが、人と比較しなければ自分がわかりようがなかったのだ。

自慢と受け取られては困るのだが——果たして自慢になるのかもわからないが——弾いた後に、隣にいた人（彼は結局サークルには入らなかったと思う）からものすごくびっくりされたのを覚えている。本当に弾ける人がいるとは思わなかったと。

ハーモニカがつくのだけれど、たぶんハーモニカを併用したのは、大学三年くらいだったかもしれない。ブルース・ハープ（ブルース用のハーモニカ）は以前からたまに使っていたが、改めて興味を深めた。そのとき、ふとディランの「くよくよするなよ」のハーモニカが心に浮かんできた。とにかく、異様なバイブレーションを伴うハーモニカなのだ。あの音はどう出せばいいのだろう。

「くよくよするなよ」はストローク演奏でも十分に格好はつく。冒頭に上げた桑田佳祐氏が茅ヶ崎で演奏したものもそれだった。しかも、四番まであるから間も持つ。けれども、やはりもう一つの持ち味がハーモニカにあるのも事実で、フルコピーしたい気持ちはずっと持っていた。

初期のディランというとサングラス姿に生ギター、ハーモニカホルダーというスタイルがわりに一般的である。60 年くらいまではあのスタイルでライブも行われていたと思う。たぶんだけれども、日本のフォーク歌手もディランのスタイルを真似たのだろう。時々ライブなどでハーモニカホルダーをつけて登場し、まったく吹かないで演奏を終えるときもあったようだ（気分が乗らなかったのだろう）。

「彼女は歓喜する。明日は花婿がやってくる。誰もが心躍る。安楽椅子にもたれるみたいに」（「どこにもいけない」）

90 年代の初めあたり、エリック・クラプトンの「アンブラグド」が大流行していて、わけでも、ブルースという黒人音楽が心をとらえていた。かつてどこかでディランは一時ブルース歌手になると思われていたと書かれていた。ブルースをアルバムに入れたりもしている。親近感を覚えていた。一方で、ディランは若い頃、ウディ・ガスリーのような大物フォーク歌手と交流を持つ一方で、ブルースの方面でもかなりの修練を経たようで、初期のアルバムなどにはトラディショナルなブルースもいくつか収められている。

ロバート・ジョンソンとかブラインド・レモン・ジェファーソンとか、リロイ・カーとか、ブッカ・ホワイトみたいな戦前から戦後にかけてのブルースを聴いてみると、いかにブルースが自分に近い音楽かがわかった気がした。しかも、はじめての気がしなかった。どれを聴いても——演歌みたいに——どこかで聴いたことがある気がしてならなかった。しかも、どれを聴いても、自分とどこかで地続きの何かを感じないわけにはいかなかった。

原曲は E である。正確にいうと、カポタストを 4 フレットにつけて、レギュラー C の手の形式で弾くと E になる。E は本来ものすごく表情の豊かなコードである。心から笑っているようにも、絶望しているようにも聞こえる。A のブルース・ハープで合わせると、ちょっとバーボンが似合いそうな、渋いブルージーな音の絡みになる。ちょっとなめただけで三日間は舌がしびれそうなサウンドだ。

ハープ独特の音にベンドというものがあり、吸う時にしか出ない。唇を狭くして、思い切って抑揚をつけると、4 分の 1 程度音がせり上がる。野性的で、反逆的だ。ハーモニカの名手は自分なりのベンドを持っている。

「くよくよするなよ」では、吸う音と吐く音が逆になり、同時に、四番まで歌った後のハープが、超ロングブレスで、きちんと間合いをはからないと息が続かなくなる。自分以外には歌わせないのだという強い確信みたいに。

今はネットの世の中で、いろんな人が歌っているが、見事に歌えているものはたくさんあっても、曲と詩の輝きをそのままに歌えているものはない。ディランだけなのだろう、たぶん。

つくづく 60 年代から 80 年代までのアーティストを見るにつけ、誰もが自分の報われなかった愛や、裏切りの悲しみや、世の不正に対する怒りや、とにかくあらゆるものに自分の感情をかなりたてているように見えた。いくぶん下品か、いくぶん上品かくらいの違いしかなかった。

高校の頃はどちらかというとポール・サイモンみたいな内省的なロックが好みだった。だが、しだいにサイモンの発する嘘くささと世渡り上手に少しばかり嫌気がさしつつあった。ビートルズなんて耳にするのも嫌だった。しいていえば、ローリング・ストーンズの爽快なまでの下品さのほうはまだ受け入れられるものだった。

ディランだけはなぜか違う雰囲気を帯びていた。誰もが思い思いの方法で自分の内面を喧しくどなり合う中で、ディランだけはいくぶん瞳を閉じかけて、何かを考え込んでいるように見えた。何を考えているのかはわからない。ただ彼の目には、他のアーティストとは違った世界が違った風に見えており、それは無限に通じる何かなのだろう。

VI ありがとう、ディラン

大学四年時、三つのさして交流もなかったギターサークルの合同ライブを企画し、第二学生会館の大音楽室で無事開催することができた。文章にしてしまうと陳腐なのだけれど、あの場で「くよくよするなよ」をやれたのが、ちょっとした記念だったように思う。

会場を出るとき、ある先輩から、「井坂君、何か嫌なことあったの？ 『くよくよするなよ』なんて弾いて」と言われたのを覚えている。何かが川の向こうから投げられた小石みたいに肩を打った。ぼんやりと思っていたことが確信に変わった。自分がどの世界の住人がわかったのだ。ときに人の口にする何気ない一言ほど、本質を鮮やかに伝えてくれる

ものはない。

いく年かを経て、大学を出て、ふとしたはずみに入った喫茶店で、ぼんやりと来し方と行く末を考えていた。たばこのにおいと古く湿った木の板の匂い、すべてが終わってしまったような虚無感にとらわれていた気がする。まさに見はからったようにふと流れてきたのが「くよくよするなよ」だった。たくさんの名もなき人生のエンドロールを見ているみたいな気持ちになった。ディランはわかっているんだと思った。人生の切なさも、喜びも。何でも。あのときの心には全く違う曲に聞こえたのが不思議だった。

「今夜流れ星を見て、君を思う。君は壁をぶちやぶろうとしていた。誰も知らない世界への壁を。僕は思う。だいじな印を見過ごして生きてしまったのか。君に見えていたものを見ずに来てしまったのか。今夜流れ星を見て、君を思う」(「シューティング・スターズ」)



ディランは言った。あらぬ方向に顔を向け、みけんに皺を寄せて、ユダヤ眉をつり上げて、あの流し目で、皮でナイフを研ぐような声で――。

「イサカ、別れがはじまりだ」

人生は無限に別れていく連続的なプロセスだ。別れていくから、この世界はまがりなりにも形姿を維持していくことができる。そして、最後には自分自身と別れる。別れもまた一つの便宜でしかない。

そんな考えもあっていいじゃないかと思う。さらに短いとは言えない時間が流れたが、また別の話だ。同じなべでなにもかもを一緒くたに煮てしまいたくなるのが人情なのだけれど、やはりやめておいたほうが無難だろう。なにせミック・ジャガーが女王陛下から勲章をもらい、ディランがノーベル賞を手にする時代になったのだから。

ただひとつ、ディランから学んだことがある。ものごとを安易に一般化するのはどんなときも間違いということだ。浮かんでくる「違う」風景を（外側の世界であれ心象であれ）、浮かんできた順番で浮かんできたままに、「違う」音と「違う」言葉を与えるべきなのだ。「違い」が愛の源なのだ。同時に表現方法でもある。

Don't Think Twice, It's Alright

井坂康志訳

もたれて思わないで
わからないし
もたれて思わないで
何でもないし
鶏鳴いて朝がきて
窓の外を足早に往く
旅を続けるよ
うん、考えないで、いい

あかりをつけてもね
知らないし
あかりをつけてもね
暗い道だし
想像してみるよ
ちょっとはましなもの
魂だけは無理
うん、考えないで、いい

呼ばないで
困るし
呼ばないで
届かないし
道すがら思う
好きだったからね
通わなかったけどね
うん、考えないで、いい

お元気で
行く先は知らない
さようならじゃないな
じゃまたねくらいかな
だれもわるくないし
今はどうでもいいし
時が失われただけし
うん、考えないで、いい